

三匹のやぎ ノルウェー

昔むかし、あるところに、ブルーセという名前の、三匹のやぎがいました。ちびやぎのブルーセと、まんなかやぎのブルーセと、大きいやぎのブルーセです。あるとき、やぎたちは、お腹いっぱ^{なか}い草を食べて太って来ようと思って、山へ出かけて行きました。

山へ行くとちゅうに大きな谷川があつて、橋^{はし}をわたらなくてはなりません。ところが、橋の下には、ものすごいトロルがすんでいました。

はじめに、一番小さいちびやぎのブルーセが、橋をトントンわたつて行きました。すると、橋の下から、トロルがどなりました。

「だれだ。おれさまの橋をわたつているのは！」

「ちびやぎのブルーセだよ。山へ行って、太つて来ようと思うんだ」と、ちびやぎのブルーセは、かわいい声でいました。

「ようし。じやあ、つかまえて食つてやる」

「ぼくは、まだ小さいんだもの、つかまえないでよ。少し待つてると、まんなかやぎのブルーセが来るよ。ぼくなんかより、ずっと大きいよ」

ちびやぎのブルーセがそういうと、トロルは、

「よしよし」といいました。

そこで、ちびやぎのブルーセは、橋をわたつて行つてしましました。

しばらくすると、まんなかやぎのブルーセが、橋をミシリミシリとわたつて来ました。トロルがどなりました。

「だれだ。おれさまの橋をわたつているのは！」

「まんなかやぎのブルーセだよ。山へ行って、太つて来るんだ」と、まんなかやぎのブルーセは、元気にいいました。あんまりかわいくありませんでした。

「ようし。じやあ、つかまえて食つてやる」

「いや、待つておくれよ。もう少しすると、大きいやぎのブルーセが来るよ。あいつは、ぼくなんかより、ずっと大きいよ」

まんなかやぎのブルーセがそういうと、トロルは、

「そうか、よしよし」といいました。

そこで、まんなかやぎのブルーセは、橋をわたつて行つてしましました。

まもなく、大きいやぎのブルーセが、橋をズシンズシンとわたつて来ました。あんまり重おもたいので、橋がミンミンいいました。

トロルがすごい声でどなりました。

「だれだ。おれさまの橋をわたつているのは！」

「大きいやぎのブルーセまだ」と、大きいやぎのブルーセは、太い声でいいました。

「ようし。じゃあ、とつつかまえて食つてやる」

トロルは、どなつて、橋の下から飛び出して来ました。

大きいやぎのブルーセは、いいました。

さあ、来い

ぼくには、角つのがふたつある

おまえの目玉をつきさすぞ

大きなけづめもふたつある

おまえの足なんかひとつじき

大きいやぎのブルーセは、トロルに飛びかかり、目玉をつきさして、足でさんざん飛ばしました。トロルは、川に落ちて死んでしまいました。

三四のやぎは、山へ行つて、草をお腹なかいっぱい食べました。ところが、あんまりたくさん食べたので、動けなくなつてしましました。もしそのままやせていなかつたなら、今まで山の上にいるはずです。

*
スニップ、スナップ、ヌード

これではなしはおしまい

原話：『北欧の民話』山室静著／岩崎美術社
再話：村上郁